

第24回総合科学技術・イノベーション会議
平成28年第21回経済財政諮問会議 合同会議 議事録（案）

1. 日時 平成28年12月21日（水）9：18～9：47

2. 場所 総理官邸4階大会議室

3. 出席者

議長	安倍 晋三	内閣総理大臣
議員	菅 義偉	内閣官房長官
同	鶴保 庸介	内閣府特命担当大臣（科学技術政策）
同	麻生 太郎	財務大臣
同	松野 博一	文部科学大臣
同	石原 伸晃	内閣府特命担当大臣（経済財政政策） 兼 経済再生担当大臣
同	高市 早苗	総務大臣
同	世耕 弘成	経済産業大臣
同	久間 和生	常勤
同	原山 優子	常勤
同	上山 隆大	常勤
同	橋本 和仁	国立研究開発法人物質・材料研究機構理事長
同	小谷 元子	東北大学原子分子材料科学高等研究機構長 兼 大学院理学研究科数学専攻教授
同	十倉 雅和	住友化学株式会社代表取締役社長
同	大西 隆	日本学術会議会長
臨時議員	山本 幸三	内閣府特命担当大臣（規制改革）

【経済財政諮問会議議員】

黒田 東彦	日本銀行総裁
榊原 定征	東レ株式会社 相談役最高顧問
高橋 進	日本総合研究所理事長
大隅 良典	東京工業大学 名誉教授

4. 議題

- (1) 経済成長に資する科学技術イノベーションの活性化
- (2) 国の研究開発評価の推進
- (3) 基礎研究の振興
～ノーベル生理学・医学賞受賞を契機として～

5. 配布資料

- 資料1-1 科学技術イノベーション官民投資拡大イニシアティブ（最終報告）【概要】
- 資料1-2 科学技術イノベーション官民投資拡大イニシアティブ（最終報告）
- 資料2-1 国の研究開発評価の推進
- 資料2-2 国の研究開発評価に関する大綱的指針（改定案）
- 資料2-3 「日本海溝海底地震津波観測網の整備及び緊急津波速報（仮称）に係るシステム開発」の事後評価結果（案）
- 資料3-1 国力の源泉である基礎研究の充実と科学技術イノベーションの創出に向けて【概要】
- 資料3-2 国力の源泉である基礎研究の充実と科学技術イノベーションの創出に向けて
- 資料3-3 私の研究歴から 基礎科学の振興に向けて
ー ー細胞生物研究者の個人的見解 ー
- 参考資料1 平成29年度科学技術関係予算の編成に向けて

参考資料 2 平成 28 年度 第 2 回医療分野の研究開発関連の調整費の実行計画
参考資料 3 第 2 2 回総合科学技術・イノベーション会議議事録（案）
配布資料 1 科学技術イノベーション官民投資拡大に向けて（内山田議員配布）

6. 議事

【鶴保科学技術政策担当大臣】

定刻となりましたので、総合科学技術・イノベーション会議と経済財政諮問会議の合同会議を開会いたします。

なお、本日は臨時議員として、山本大臣が御出席です。

また、議題 3 からプレスが入ります。

それでは、議事に入らせていただきたいと思います。

議題 1 「経済成長に資する科学技術イノベーションの活性化」について、榊原議員より説明をお願い申し上げます。

【榊原議員】

経済財政諮問会議と総合科学技術・イノベーション会議の合同委員会で取りまとめた官民投資拡大イニシアティブについて御報告いたします。資料 1-2 が本文ですが、資料 1-1、A 3 の概要版で御報告します。

まず、第 1 項の基本的考え方ですが、総合科学技術・イノベーション会議の司令塔機能の強化を図り、Society 5.0 の実現に資する科学技術予算の量的・質的拡大を果し、第 5 期基本計画で定めた対 GDP 比 1% の目標の達成と大学等への民間投資の 3 倍増を目指します。そのための具体策として、第 2 項ですが、3 つのアクションを掲げております。

1 点目は予算編成プロセスの改革でございます。今後、SIP 事業を継続・発展させるということで、内閣府が主導する SIP と各省が提案する SIP、この 2 本立ての政策で実行したい。官民で民間投資誘発効果の高いターゲット領域を設定した上で、各省提案の SIP には、今回新設する科学技術イノベーション官民投資拡大推進費、これを活用します。ターゲット領域を設定する際には、政府の財政支出の効率化に貢献するイノベーションの推進にも配慮したい。

2 点目は制度改革ですが、産業界からの投資拡大のための大学改革を推進します。

3 点目はエビデンスの活用ということで、主要な政策形成にエビデンスを活用します。

最後の第 3 項では、総合科学技術・イノベーション会議の司令塔機能強化とこれを支える事務局機能の強化の必要性を述べております。

資料の説明は以上でございますが、一言申し上げたいと思います。御案内のとおり世界はイノベーションの熾烈な競争を繰り広げておりますけれども、我が国の科学技術イノベーションへの投資拡大というのは極めて重要な課題でございます。産業界は Society 5.0 を世界に先駆けて実現すべく積極的な投資拡大を進めます。また、併せて大学などへの投資の 3 倍増を着実に実現いたします。政府におきましても、所要の予算確保を始め、本日提案した官民投資拡大イニシアティブ、この着実な実行をお願いしたいと思います。

なお、経団連でも先日でございますが、Society 5.0 の実現に向けて、年 2,500 億円規模の政府研究開発予算を新たに確保した上で、SIP や IMPACT、あるいは FIRST 型のプロジェクトを大胆に実行すべきことを提言しております。今後、このイニシアティブを来年度の成長戦略や予算編成の中核に置いて、科学技術イノベーションの活性化に国を挙げて取り組んでいただきたいと思います。

私からは以上でございます。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。

それでは御自由に御発言をいただきたいと思います。本日御欠席の内山田議員からの御意見を机上に配布させていただいておりますので、御参照いただきたいと思います。

それでは、どうぞ、橋本議員。

【橋本議員】

本イニシアティブの策定において最も重要な観点の一つは、世界で最もイノベーションに適した国の実現へ向けて、2013年に第2次安倍政権ができて、最初に発足して、最初につくった日本再興戦略の中でうたわれている総合科学技術・イノベーション会議の司令塔機能強化

の実現であります。現在、総合科学技術・イノベーション会議が主体的に運用しているSIPは、産業界から高い評価を得ていますが、その予算規模は科学技術関係経費全体のわずか1%にすぎません。今回まとめられた最終報告では、総合科学技術・イノベーション会議が真の司令塔としての役割を果たすべく、SIP型マネジメントを各省のプロジェクトへ展開することを目指した新型推進費の創設が提案されています。今回の提案がうまく機能するためには、各省庁にとってインセンティブが働くよう制度設計を行っていくことが重要であり、総合科学技術・イノベーション会議の司令塔としての調整力が試されるところです。この最終報告の実現に向け、引き続き経済財政諮問会議と連携しつつ、取り組んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。
高橋議員。

【高橋議員】

官民投資拡大を通じて最先端技術を新分野の創出や具体的な課題解決につなげ、経済再生と歳出効率化の双方を実現していくべきだと思います。例えば、徹底した官民でのデータの活用やICT、AI化を通じたインフラのスマート化、それから、健康予防分野、こういった分野は中長期的に経済の活性化、財政効率化の両面で効果が期待される分野です。こうした分野への研究開発に官民で優先して取り組んでいくべきということをお願いしたいと思います。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。
上山議員、お願いします。

【上山議員】

一国の経営を企業体にたとえるならば、科学技術イノベーションは研究開発部門でございますけれども、その実態がなかなか分かっていないと考えております。現在、総合科学技術・イノベーション会議の方では、全府省を合わせて3.5兆円の全てのプログラムと、その予算の内容を総合科学技術・イノベーション会議に集約する形で分析を始めております。さらに例えば大学とか研究開発法人というのは、研究開発のある種の内燃機関のようなものでございますけれども、その十分なケアと調整ができていない、ということが、そのためにエンジンが動いていないということが、現在の苦境の大きな原因柱だというふうに考えております。今、大学の全ての内部データを総合科学技術・イノベーション会議に集約するという作業を行っております。この分析を通して、一体どのような環境でこのエンジンが動いていないのかということを探査するという作業を総合科学技術・イノベーション会議が一貫してやっていますというふうに試みております。いわば、このエビデンスをもって、企画部隊としての総合科学技術・イノベーション会議が科学技術の司令塔となり、官民の投資を誘発することが最大の国富の増大につながるというふうに考えております。したがって、単に予算を増額するだけではなく、それをではなく、むしろ効率的に、さらにまた戦略的に用いる方策を立てることが、このことを行っていく司令塔としての機能の強化につながるということが非常に必要だと思っております。その方向で、事務部隊も含めて、この総合科学技術・イノベーション会議の現状を少しずつ変えていかなければいけないと強く思っております。

以上でございます。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。
久間議員、お願いします。

【久間議員】

私はSIPのガバナリングボードの座長を務めさせていただいておりますが、SIPが高く評価されている理由は、自動車用エンジン等、国益につながる課題に対して、基礎から実用化まで一貫通貫で行っていること、それから、省庁連携、産学官連携を強力に推進できるPDを採択していること、さらに、厳格な成果評価を行い、次年度予算に反映していることなどですが、何といたっても産業界が本気になって参画していることです。GDP600兆円の実現に向けて、SIPを国家重点プログラムとして継続、拡大すべきと考えます。

政府にお願いしたいことは、S I Pの政府研究開発予算を大幅に拡充することです。また、産業界は課題設定から実用化まで責任を持って、リーダーシップを発揮するとともに、産業界としてもマッチングファンドとして、研究開発投資を行うことが必要と考えます。科学技術立国として、世界のトップ集団に残れるかどうか、今が瀬戸際と考えます。

以上です。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。
十倉議員、お願いします。

【十倉議員】

イノベーションとグローバル化は、これは言うまでもなく経済活力の源泉であり、特に島国の日本では、古くから科学技術立国、または貿易立国という言い方もされております。この2つは、日本の成長に不可欠な真理であり、また、国のよって立つ基盤だと思いません。しかしながら、御案内のように昨今の世界的な保護主義の台頭は予断を許さず、大変残念ではありますが、貿易立国の確立に向けて、逆風が吹いている状況かと思えます。

こういう状況にありまして、また、こういう状況であればこそ、安倍総理がおっしゃっていますように、日本を世界で最もイノベーションに適した国にするべく、科学技術立国に注力する重要性が非常に高まっているのではないかと思います。

そこで、先ほどの榊原会長からの御報告のとおり、また、本日御欠席の内山田議員からもペーパーが出ておりますが、政府の皆様には財政状況厳しい折ではございますが、科学技術予算への傾斜配分、より一層の充実をお願いしたいと思います。特に私といたしましては、企業ではできないような基礎研究の充実に、また、分野としてはバイオ・ゲノム分野にも光を当てていただければと思います。

私からは以上であります。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。
他にございますでしょうか。
よろしければ、ここで石原大臣に御発言をお願いしたいと思います。

【石原経済財政政策担当大臣】

榊原議員から御説明いただきました、科学技術イノベーション官民投資拡大イニシアティブに基づきまして、経済財政諮問会議でも、総合科学技術・イノベーション会議の皆様方と連携させていただいて、経済成長につながるイノベーションの活性化に向けて取り組ませていただきたいと思っております。

以上です。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

私からも一言申し上げたいと思います。今般のイニシアティブを受け、新型推進費の具体的な検討、制度改革の実現やエビデンス構築のためのさらなる検討など、3つのアクションの実行に向け、担当大臣として全力を尽くしてまいりたいと思います。

それでは、2つ目の議事に入らせていただきます。

「国の研究開発評価の推進」について、久間議員より御説明をお願いします。

【久間議員】

資料2-1の1ページを御覧ください。国の研究開発の評価指針の改定案を取りまとめました。改定案では、第5期科学技術基本計画を踏まえまして、イノベーション創出を促進するため、アイデアの斬新さと経済・社会インパクトを重視した研究開発等を高く評価する手法を取り入れました。

次に3ページを御覧ください。文科省の日本海溝海底地震津波観測網の事後評価結果です。本観測網は今年度より運用が始まり、11月21日の福島県沖の地震では、従来より約20分早く津波を観測いたしました。今後、沿岸市町村の地震・津波防災体制の強化に大いに貢献することが期待できます。

以上です。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。

それでは提出資料のとおり決定させていただいてよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。

それでは、議題3「基礎研究の振興」について、原山議員より御説明をお願いいたしたいと思っております。

【原山議員】

資料3-1を御覧ください。科学技術イノベーションの源泉は基礎研究にあり、研究者の発意による学術研究と目的志向型の基礎研究がその両輪をなします。しかし、日本の基礎研究の状況はと申しますと、予算、人材ともに閉塞的な状況にあり、これを払拭するには、研究開発投資の拡大、基礎研究と人材育成の安定的投資、さらに社会が支える仕組みの構築が必須でございます。このため、大学は改革を断行して、人材、研究への投資を呼び込み、政府は総合科学技術・イノベーション会議が示す戦略のもと、官民投資拡大イニシアティブを実行し、民間に研究開発投資を促します。民間投資の呼び水として国の基礎研究の投資拡大を強く求めます。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございました。

それでは、ここでプレスを入れさせていただきたいと思っております。

(プレス 入室)

【鶴保科学技術政策担当大臣】

それでは、ノーベル生理学・医学賞を受賞されました、大隅栄誉教授より「私の研究歴から基礎科学の振興に向けて」と題しまして、プレゼンテーションをお願いをいたしたいと思っております。

大隅教授、よろしくお願いいたします。

【大隅栄誉教授】

東京工業大学の大隅でございます。

このたび、ノーベル生理学・医学賞をいただき、大変光栄に思っております。それで、最初に、ノーベル賞について少し述べさせていただこうと思っておりますが、日本でノーベル医学賞といわれる賞は、正式には「Nobel Prize in Physiology or Medicine」、「or」でありまして、私はノーベル生理学賞をもらったんだと思っております。私は今年、唯一の単独受賞だったということも含めて、ノーベル財団では、多くの議論があったみたいですが、私は基礎科学の根源を突き詰めてみようというノーベル賞の最初の原点に、立ち返っていただいたということ、大変、私自身はありがたく思っております。

ただ、ノーベル賞だけが賞賛されるような雰囲気というのは、私は大変危険だと思っております。ノーベル賞の研究にも、それから日本の研究に対する様々な賞にもたくさんの方が携わっているということを御理解いただければと思っております。

科学というのは、技術と大変接近してきましたけれども、科学というのはあくまで真理の探究、ノーベル賞の授賞式のときにも強調された、好奇心に基づく研究というのを大切にすることが非常に大事でありまして、役に立つということだけを目的にすると、実は癌研究みたいなものも癌細胞を研究していれば、癌が分かるかということ、正常な細胞の状態が分からないと、癌は分かりませんし、私の研究も、実はいきなりこれが癌の研究につながるだろうとか、神経変性疾患につながるだろうと思って始めた仕事ではありません。そういうことで、そういう例は枚挙にいとまがありません。科学は人類の歴史の中であって、未来を支える活動だという理解をしていただければと思っております。本日は私の研究の話を少しするという要請がございましたので、その話をさせていただきます。

私はずっと一貫して、近代生物学は、生命とはいかに動的な存在なのかということの研究してきた歴史だと思っております。私は、ここにあります分解という問題に着目をいたしました。合成というのは、非常にポジティブな印象があって、たくさんの方が研究していたんですけれ

ども、分解というのは、余り皆さんの注目を集めませんでした。

少し例を挙げさせていただきます。私たちの体の中では1日大体2~300グラムのタンパク質が毎日つくられているという計算がされています。けど私たちは80グラムぐらいのタンパク質を食事から摂って、そこからアミノ酸を得てタンパク質を合成しています。とても足りないわけですが、これは何が起きているかということ、私たちの体の中のタンパク質が壊されて、アミノ酸になって、大半は実はこれをぐるぐる回している見事なりサイクルシステムになっているということになります。私たちは、水だけでも1週間ぐらいは平気で生きていられるというのは、実は分解に伴うリサイクルのシステムが存在しているからということにほかなりません。

それで、分解がどれぐらい大事かということは、日ごろ目に見える幾つか例をお話します。私は植物が好きなので、こういう絵をよくお示しするのですが、夏には、今、一生懸命光合成をしていて、葉っぱが緑ですが、秋の収穫期になると、皆さん葉っぱが黄色くなるということはお存じだと思います。これはなぜこうなるかということ、ここで光合成をしていた葉緑体という緑の色素を含んだ構造体が全部壊されて、それがアミノ酸になって転流されて、お米のタンパク質をつくる。それで私たちがおいしいお米を食べているというのは、実は葉っぱのタンパク質が分解して、米にとっては次世代のために種をつくっているという作業になります。こういうふうには、実は合成と分解というのは表裏一体のものであって、従来考えられていたよりずっと能動的な活動で、高度に制御された過程であろうというふう考えられます。

私の研究課題でありますオートファジーという言葉は、1962年にクリスチャン・ド・デューブというノーベル賞学者が、自分を食べるというギリシャ語からつくった造語であります。それで、自分自身を分解するという作業なのですが、これに関しては、その後、二十数年間、ほとんど分子機構につながるような研究が進まない時代が続きました。

それで、私は東大の理学部の助手になって、酵母の研究を始めまして、1988年、東大の教養学部の助教授になったときに、オートファジーの研究を始めることになりました。私はそのとき既に43歳だったということもいろいろな意味を込めて、私はいろいろなところでお話をしています。

具体的に見ますと、酵母の細胞には、これぐらいの大きさの何の変哲もない液胞というコンパートメントがありますが、この中にタンパク質を分解する酵素が含まれている。もし本当にこの中で分解が起こるんだとしたら、問題はいつ何が、細胞質のタンパク質がこの中に運ばれて、壊れていくかということが問題になるだろうと考えました。

私はここの液胞の分解酵素を、欠失した株を用いて、それを先ほど言ったような、状態にすると、タンパク質の分解が誘導されると考えて、窒素源を飢餓にしたときに、実は液胞の中にこういう構造がたくさんたまっていくということ、今からほぼ27年前に見出しました。これはとてもおもしろい過程に違いないと思って、その分子機構の解析を始めました。

それで、これが電子顕微鏡の切片像なんです、見るからに、たまった構造は、細胞質の一部を取り込んで、分解コンパートメントに送っているんだということが一目瞭然になりました。その過程は、実は細胞の外に二重膜の袋ができて、二重膜の袋が液胞と融合して、中身がこういう形で液胞の中に取り込まれていきます。野生株、普通の株ではこの構造は数十秒で全部中身ごと壊されていくという過程だということになります。私たちはもう二十数年前に、酵母で大規模に飢餓のときにタンパク質分解が起こる過程の模式図を書くことができました。酵母がいろいろな栄養飢餓を感じると、突如としてこういう膜があらわれて、細胞質の一部を取り囲んで、それを分解コンパートメントに送っていくんだ。この過程は、動物細胞ではこんな大きな液胞はありません、小さなライソゾームという分解コンパートメントがあるんですが、現象としては、これはそれまで知られていた動物細胞のオートファジーと同じだということが分かったわけです。それから、酵母の利点を生かして、それにかかわる遺伝子を取って、それがどんな機能をしているかということ、20年来、いまだに私たちは続けているということになります。

オートファジーの遺伝子が見つかったということは、この分野に決定的な意味を持っていて、今の時代であれば、遺伝子が分かれば、その遺伝子のノックアウトとか、ノックインとかノックダウンとか、いろいろな操作をすることで、一体オートファジーがどんな意味を持っているかということ、いろいろ操作をすることができます。例えば、私たちの研究室で水島が最初に始めたのは、マウスでオートファジー遺伝子のノックアウトをすることで、生まれてくるんですけども、12時間ぐらいで死んでしまおうとか、それから日本のグループで、肝臓でオートファジーが働かなくすると、こういう不要なタンパク質がたまって、最終的には肝臓が生じるというようなこと、それから、実はオートファジーをとめると、オートファジーがこういうふう細胞の中に侵入してきたバクテリアを包み込んで壊していくという作業にもかかわっているとか、胚発

生にとっても重要であるとか、抗原提示に大事だとか、寿命の問題にも絡んでいる。このように非常に多くの問題がオートファジーとかかかっているということが現在分かってきています。

特にオートファジーは栄養源のリサイクル以外に、細胞の中をいつもきれいにして、変なものたまるということを抑えている作用であるということが分かってきていて、これが神経変性疾患を含めて、さまざまな病気の問題とつながっています。

このグラフはオートファジー関連の論文の推移を示していますが、私がオートファジーの研究を始めたのはここら辺なんですけど、非常にほとんど論文も出てない領域でありました。それで、私が強調したいのは、はやりになったら、それはすでにはやりなので、こういうところで研究がサポートされていくということがとても大事で、しかも、このグラフが示しているように、今、物すごく大きな領域になりましたけれども、その領域が立ち上がるまでには20年ぐらいのラグがあるということを理解していただければと思います。

そういうことから、私は科学の発展というのは、多くが予測不可能であるということで、そのためには、裾野が広い研究が奨励されるということが必要で、そういう中から幾つか尖ったピークがあらわれてくるということがとても大事なことだというふうに思っています。

それで既に、これをやれば必ず結果が出るだろうということは、必ずしも大きな成果につながっていかないと思っています。

それから、もう一つは長期的な視点というのがとても大事だと私は思っていて、科学と技術は今、非常に一体化していて、技術が進歩することで科学が進歩する、科学が進歩することで、技術が進歩するという相互関係にあります。一方私はいずれにしても、今、大学の研究者が問題になっているのは、非常に短期的な成果が求められていて、数年間で役に立つ研究をしなさいというようなプレッシャーの中に置かれているのではないかと思います。何とか少し研究者に時間的にも、精神的にも余裕があるような社会にならないかと思っています。

では、時間が来ましたので、幾つか私、論点を書いてみましたが、時間ですのでここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

【鶴保科学技術政策担当大臣】

大隅先生、御協力ありがとうございました。

御指摘のとおり、大変時間が迫っております。小谷議員、大西議員、松野大臣からご発言をお願いします。

【小谷議員】

日本は国際社会のなかで科学技術におけるオリジナルな成果を産み出し続け、尊敬される国となりました。

基礎研究と技術開発はイノベーションを生み出す両輪であり、バランスよくお互いを刺激しあうことで社会を豊かにするものです。特に研究者の内在的な動機に基づく研究は、長期間の後に破壊的なイノベーションを産み出します。日本はこれまでそのような学術研究により社会に貢献してきました。

例えば、サイバーセキュリティを支えているRSA暗号には大きい数の素因数分解が使われます。素数とは整数を分解していったときの最小単位であり、それ以上分解できない数です。素数に対する興味は純粋に学術的であり多くの数学者を引き付ける難題を産み出しました。日本の数学者も多く貢献しました。なかでも解決に360年を要したフェルマーの予想解決への大きな手掛かりは1955年に提出された谷山—志村予想であり、素数と楕円曲線とモジュラー形式の間の深い関係が示唆されました。ところが、この関係がRSA暗号に必要な大きな素数を産み出す技術の根幹となっています。また、現代のファイナンスの基礎理論である確率解析は伊藤清が20世紀の半ばにランダム性を理解したいという学術的興味から開発したものです。伊藤清はこの貢献により国際数学連合ガウス賞の第一回目が授賞されました。このような例は枚挙にいとまがありません。イノベーションの世紀である21世紀に数多くのノーベル賞受賞が日本からでてくることは、その表れであろうと思います。

学術研究は長期的視野で行われますが、一方その成果がイノベーションに結びつくスピードは加速し、またその道筋は多様化しています。このような世界の潮流において日本が恒常的にイノベーションを産み出すに適した国となるためには、長期的視点での基礎研究や人材育成へ安定的な投資を行い、これをイノベーションへとつなげる仕組みを充実すると同時に、基礎研究の成果を社会が尊重し支える文化を醸成することが必要であると考えます。政府、研究機関、企業、社会が一体となり大きく前進したいと思います。

【大西議員】

大隅先生は基礎研究の重要性を強調されました。科学技術は、原理や法則を極めることを通じて発展してきたので、科研費などに典型的な研究者の提案に基づいた研究スタイルが重要です。国もそうした分野の研究費を十分に提供することが求められます。

一方でそうした原理や法則をどのように応用していくのかに関心を持つ研究者も増えていません。今週初めに、私が学長をしている大学が、マレーシアでアセアン大学学長会議を主催し、アセアン10か国のうち8か国＋日本から20以上の大学が集まって、国際的な連携について話し合いました。大小、単学部から総合大学まで、様々なタイプがありましたが、どこも研究の国際連携、学生の交流、産学の連携などに積極的に取り組んでおり、また政府からも特別な資金や制度面の支援を得ている大学も多いことも示されました。日本の大学も、アセアンをはじめとする世界の大学との連携を強めて、協力や切磋琢磨を通じて、基礎から応用までの研究をいっそう強力に進めることが必要と思います。

【松野文部科学大臣】

我が国の高い科学技術水準を維持し、大隅先生に続くノーベル賞受賞者を輩出するために、文部科学省では、基礎研究の振興や若手研究者の環境整備等に関する検討会を新たに設置し、具体的な対応策について検討を開始しました。年度内にも検討結果をとりまとめ、その着実な実行を通じて、基礎研究を一層強力に振興してまいります。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

それでは最後に安倍総理より御挨拶をいただきます。

【安倍内閣総理大臣】

大隅先生、ありがとうございます。先生のノーベル生理学・医学賞の受賞に改めて心からお慶びを申し上げたいと思います。

先生は人がやらないことを手掛けるという信念のもと、チャレンジ精神と御努力で研究を極め、そして、医療への応用も期待できる独創的な研究成果を生み出してこられました。お話を伺っておりまして、基礎研究の振興には大学等が経営改革と資金の多様化を進め、長期的視点に立った取組を確保し、若手の挑戦意欲や自立性を高めるような環境を構築することが極めて大切であると改めて認識をいたしました。

本日、報告のございました官民投資拡大イニシアティブは財政支出の効率化への貢献に配慮しつつ、民間投資の誘発効果の高い領域に各省施策を誘導する新型推進費の実現、また、大学等への民間資金を呼び込むための寄附や起業の環境の改善等を目指した重要な取組であります。担当の鶴保大臣には、経済財政諮問会議及び関係大臣等と連携して、イニシアティブの具体化にしっかりと取り組んでいただきたいと思います。ありがとうございます。

【鶴保科学技術政策担当大臣】

ありがとうございます。

では、プレスの方々はここで御退室をお願いいたします。

(プレス 退室)

【鶴保科学技術政策担当大臣】

本日の議事は以上でございます。

9月に開催をいたしました第22回総合科学技術・イノベーション会議の議事録及び本日の資料は公表いたします。

以上で会議を終了させていただきます。

ありがとうございました。

以上